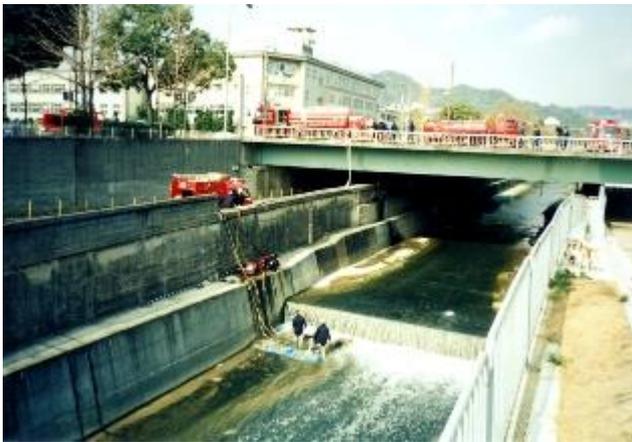


悔いを残したくない(1995年3月号掲載・小野 泰男)



平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部地方に震度7の大地震が発生した。私は、あの時の恐怖を一生忘れることはないであろう。その一瞬は障子の振動から始まった。

「ガタガタガタ・・・」

何の音だろうと目覚めた瞬間、地響きとともにドドーンと体が4、5回突き上げられた。頭の中では何か悪い夢でも見ているのではないかと考えているところに、次の横揺れが襲ってきた。この時足元から子供用勉強机が顔めがけて倒れてきたので、無意識に「ウワー！」と大声を出し、とっさに両手で受け止め、初めて現実の地震であることを認識した。

横には、小学校6年の長男と次男が寝ていた。見ると私と同じように机が二人の上に倒れていたが、「大丈夫か」と声をかけると「大丈夫」と二人から元気な声が返ってきたので一安心し、隣室で寝ている妻と5歳の三男の無事を確認するため再び大声を発した。隣室からも「大丈夫」の声を聞こえたときは、言葉に出せない安堵感を覚えた。

冷静さを取り戻した私は、地震イコール火災であるからガスの元コックを閉め、電気コンセントを抜き、次いですぐに表に出るよう家族全員に指示した。しかし、炊事場は食器棚が転倒、冷蔵庫の中身(ビール、たまご等)が飛び出し、ガラス類が散乱し、見るも無残な光景であった。

なんとか着の身着のまま表に脱出した私たちに、再び余震が襲った。地震の怖さを身に沁みて感じた瞬間でもあった。家族全員が地震の恐怖と寒さから身震いして入るのに気付いた私は、妻とともに再び自宅に戻り最低限の衣類と貴重品だけを持って出た。

隣近所の人たちはどうなったのだろうか、と思った私は、大声で安否を気づかったが、幸いけが人もなく無事であることが確認できた。

「ウーウーウー」

あちこちでサイレンの音が聞こえたので、空を見上げると近くではないが東、西、南方面の数箇所から黒煙がもくもくと空を突き上げていた。

「署に行かなくては」と言った私に妻は「こんな時に家族をほっといて行くの」と反論した。

「うちの家族は無事だ！他に困っている人がきっとたくさんいる。今行かなくては一生涯悔いが残る」

と妻を説き伏せ、幸い無事であった近くに住む妻の親戚に家族を預け、長田消防署に向かった。

署に到着した私の目に最初に入ったのが、西側の数箇所では火災が発生しているのに消防隊による放水が全くなかったことであった。

「消火栓が使えない、水が出ない」

あちこちで隊員がそう叫んでいた。さぞかし悔しい思いであったろう。

署の西側を流れる湊川を堰き止め、水を確保することになった。私はこれが最初の任務だと思い真っ暗な署の地下駐車場から土のうを何回も運んだ。空も明るくなって何回目の運搬中だったろう、年配の男性が「人が生き埋めになっている、助けてくれー」と悲壮な表情で駆け寄ってきた。ちょうどその時、私同様自発参集していた機動隊の辻主査が近くにいたので一緒にとび口2本を手に現場に向かった。

署の南側約100メートルの文化住宅に到着すると、あたり一面に都市ガスの匂いが充満し、なおかつ西側40～50メートル付近の「そごう配達所」が火災に包まれ延焼中であった。

「救助に入れば死ぬかもしれない」

ふと頭の中をよぎった。

住宅は1階部分が完全に崩壊していた。市民の誘導により生き埋めになっている住居の2階に進入し、辻主査とともに大声で生死を確認した。

「どこや一、声を出せ」

そう叫んでいるうちに女性の声で「ここ一、助けて一」と叫び声の下から聞こえた。

「生存者が居る、助け出すまではもうここから出られない」と私は決心した。

声が聞こえた場所の家具類を退け、畳をめくり底板を破壊し、やっとのことで女性を救出することができ、これで表に出れると思ったところに「もう二人いる、助けて」と悲壮な表情でその女性は訴えた。気持ちを切り換えるのに時間はかからなかった。

二人目は、少し離れた畳の下から若年男性を救出することができた。もう一人と思い、声をかけるがなかなか返事が返ってこない。

ようやく奥の部屋の押入れの下付近からかすかな声が聞こえたので、押入れの底板を破壊し覗き込んだが、タンスなどの家具類が視界をさえぎり本人を確認することができない。この時、長田消防署の平川隊員が一人応援に駆けつけてくれた。運動不足で体の疲れきった私には、このうえない応援であった。

辻主査と平川隊員二人で1階部分に徐々に進入、少しずつ家具類を破壊し、その破片を2階部分に搬出した。何分ぐらい経過しただろう、やっとのことで下半身がタンスの下敷きになった若い男性を発見することができた。

この頃になると、窓の外に火の粉がパラパラ飛散するのが見え始めていた。私は1階の二人に救助を急ぐよう伝え、自らも1階部分に身を乗り出して家具類の搬出を急いだ。男性は足首が骨折している模様で、時々「痛いー！」と大声をはりあげた。少しかわいそうであったが命には代えられず、なかば強引に引き抜き救助することができた。

どちらからでもなく、辻主査と堅い握手を交わしたことを昨日のこのように覚えている。

次に私が向かった現場は、長田区大道通の火災現場であった。メンバーは機動隊の辻主査、警防課の濱田主任、垂水消防署の菅井主任とそれぞれ勤務地は違っているけれど、そこは消防人。車はないけれど一個小隊で筒先、ホースを持って現場に向かった。

濱田主任が機関員である。市民球場近くの防火水槽、これを使い切れば市民プールと給水確保につきつき走り回った。我々はホース延長、転戦と火の海の中を走り回った。

10時間以上経ったであろうか、周囲も暗くなり大阪、名古屋などの他都市の応援隊も徐々に増え、当市の応援隊も増えたことから筒先も交替できるようになった。いつしか辻主査も他の現場に向かったらしく姿はなかった。

腹が減った、水が飲みたい、こう思っていると近くの駐車場で市民がご飯を焚き、我々に食べさせてくれた。長い人生の中で一枚の海苔を巻いたおにぎりがこれほど美味しいとは思わなかった。

翌 18 日午前 3 時ごろ、長田消防署 3 階の会議室に戻った私は、椅子に座るやいなや眠りについてしまった。

2 日目は、他都市の救助隊の先導役をすることになった。岡山県の津山消防組合消防本部、赤磐消防組合消防本部の救助隊を先導し、長田区の私の自宅近くの六番町 5 丁目、池田上町等数箇所の救助現場に向かったが、結局 2 名の女性を倒壊現場から搬出するも既に死亡していた。このうち六番町の女性は、私の消防同期生の母親であった。私の息子もこの夫婦が営む駄菓子店によく行き、可愛がってもらったと聞いている。心からご冥福をお祈りしたい。

夕方、署に連絡を取ると、私は職員の連絡不明者リストに載っており、署長も非常に心配していると聞いたので、あわてて署に戻り、長田消防署での長い 2 日間が終了した。